

## 椎名麟三におけるユーモアの問題：カフカの〈二人〉を手がかりに

金, 慶湖  
九州大学大学院地球社会統合科学府：博士後期課程3年

<https://doi.org/10.15017/1901287>

---

出版情報：九大日文. 27, pp.39-49, 2016-03-31. 九州大学日本語文学会  
バージョン：  
権利関係：

# 椎名麟三における

## ユーモアの問題

——カフカの〈二人〉を手がかりに——

金 慶 湖  
KIMURA  
KINRYUKU

この二つのボールに悩まされた主人公が夜を明かし、やがて会社へ行くと、今度は愚かな「一人の助手」に付きまとわれる。この「二つのボール」や「二人の助手」のような、主人公に付きまとう〈二人〉が、カフカの作品にはしばしば登場するのだが、そうしたカフカの影響から椎名麟三も数多くの作品に奇妙な〈二人〉を登場させている。椎名は、次のように書いている。

### 一、はじめに

カフカの短編『ブルウムフェルト、ある中年の独身者』(一九一五)は、主人公の「中年の独身者」が下宿のアパートの階段を昇つてゆく場面で始まっている。「それは骨の折れる仕事であった」。彼は「完全な孤独な生活にまことにうんざり」し、「もし同伴者がいたら」と思いながらも、あれやこれや理由を立て、結局「もう三十年間も一人で階段を昇ることにしよう」と思う。そんな思案の末、彼は「身を引きずるよう」にして七階の自分の部屋にやつとたどり着いた。しかし、そこには「思いもよらない光景」が広がっていた。

白い小さなセルロイドのボールが二つ並んで、寄木張りの床の上を跳びはねている。一方が床を打つときには、他方は上に跳びあがっているというぐあいだ、どちらも夜々としてその遊びをつづけているのである。<sup>①</sup>

カフカの『ある中年の独身者』を読んだ。二つのボールが(ピンポン玉のような)彼の部屋のなかで、カタカタ音をたてて、彼の背後につきしたがうことと、事務所で年若い助手たちに悩まされることが、並列して書かれている。このボールの場合、一つであった場合は、あるおそろしさ、ある意味が感じられる。いわばそれは絶対的な何かをあらわしているからだ。だが、それが二つとなると、ユーモアとなる。それが喧嘩し合っているとすると、なおいいだろう。(略)二つの否定の同時性。<sup>②</sup>

椎名にとつて、ボールが「一つ」の場合、それはある恐ろしい「絶対的な何か」を表わす。しかし、それが「二つ」となると、それらは「二つの否定の同時性」という意味合いとして「ユーモア」となり、「絶対的な」性質を制限する。同時の否定の狭間から生まれ、絶対性を制限する仕組みとして把握される、こうした椎名の「ユーモア」は、「絶対的な何か」に立ち向か

うための椎名の思想的な武装の方法でもあった。本稿では、カフカの「二人」を手がかりとして、椎名の「ユーモア」とは具体的に如何なるものであるかを確認し、それが椎名のキリスト教文学として如何に表現されているかを考察する。

## 二、椎名麟三における「ユーモア」とは

谷口茂は、カフカのこの短編について次のように述べている。

『ブルームフェルト、ある中年の独身者』は、一九一五年二月八日から書き始められ、程なく中断したもののだが、この執筆時期が注目されるのは、それが一月末のフェリースェとの再会の直後だからである。(略) 彼が彼女との結婚問題にかかわり続けたのは、結婚が「つまりはユダヤ男としての義務感に基づく一種の理性結婚の試みであったと同時に、作家として『中休みの時間』に縋りつくことのできる支えの問題だった」(本書八五頁)からである。ユダヤ男たるカフカにとつて、「妻なき男は人間にあらず」(『日記』一七四)であり、「独身は罰しかもたらさない」(同四一八)。しかし、結婚へはとも気乗りがしない。ではどうすればいいのか。作家である彼としては、このジレンマの様相を作品化してみるしか手がないだろう。<sup>(1)</sup>

そこで、この小説が生まれた。結婚への躊躇と「ユダヤ男と

しての義務感」という両者をめぐるカフカの心の中の対決がこの作品を書かせた原動力であったことが分かる。そして、その悩ましい「ジレンマの様相」が、主人公に付きまとう「二つのポール」、そして「二人の助手」として具現されたと言えよう。カフカの一生の友で、カフカの編集者としてよく知られるマックス・プロートは、このことについて次のように述べている。

カフカは、このようなはげしい心の動揺のうちに、繰り返し繰り返し自身に対して良心の問題を提起して来たが(「このような苦痛に耐えなければならぬこと、このような苦痛を惹き起こすこと」という歎きが日記に載っている)、そうした経験こそ、婚約解消の直後に出来た二つの新しい大著の源泉である、と見なしても見当ちがいでないと思う。九月には彼は私に小説「審判」の第一章を、十一月には「流刑地にて」を読んで聞かせた。作家として自己を罰し、贖罪行為の場面を想像した記録である。<sup>(4)</sup>

カフカの内面では、結婚への憧れと結婚がもたらさずであろう拘束への拒否反応が交錯しており、婚約解消後はその「罰」かつ「贖罪行為」として、この時期の創作が成されたことが分かる。しかし、それからは、椎名の考える「二つの否定の同時性」やそこから湧き出る「ユーモア」が必然的に導きだされるわけではあるまい。ユーモアとは、「上品な洒落やおかしみ。

諧謔」<sup>(5)</sup> のことである。「社会生活（人間関係）における不要な緊迫を和らげるのに役立つ、婉曲表現によるおかしみ」<sup>(6)</sup> であり、ユーモアは結局「おかしみ」に集約される。このような「おかしみ」が、カフカの対立し合う「ジレンマ」の中から必ずしも湧き出ているとは言い難いのである。しかし、椎名の場合、対立する「二つ」からは必ず「ユーモア」が生まれなければならない。また、逆に言えば、「ユーモア」を導くためには、「二つの否定の同時性」は必要不可欠でもある。

ところで、椎名の「ユーモア」を考察していく前に、まず椎名の「自由」というテーゼについて考える必要がある。昭和四十二年、椎名は五十六歳の自身の人生を反芻し、エッセー「わが心の自叙伝」を書いていく。そこには彼の幼年時代から、家を出した少年時代と、非合法の政治運動に参加し、検挙され、転向し出獄した青年時代、そして戦後を迎え、作家となり、キリスト教に入信するまでの椎名の「心」の遍歴が淡々と綴られている。冒頭部分には「残念ながら私の一生は、(略)潤色したって、自由を求めて試行錯誤を重ねた道化師というところがせいぜいのところだろう」<sup>(7)</sup> と書いてあり、椎名の生涯を通しての課題は、「自由」の問題だったということが分かる。ならば、何からの自由なのか。遠藤周作が、「氏が繰り返して述べてきた主題は自由の問題であり、その自由とは何よりも死からの自由であることは今更、私が言うまでもない」<sup>(8)</sup> と書いているように、椎名の「自由」は「死」からの自由であり、彼は「異常なまで死を恐怖」<sup>(9)</sup> した。より厳密に言うと、彼が求めたのは、「死」

という厳然たる「絶対的な」事実から逃れるための精神的な基盤であった。結果的に、椎名は文壇デビューを果してわずか三年後の昭和二十五年、キリスト教の洗礼を受け、「死」を信仰の世界で克服し、彼の居場所を得た。その後のある日、突然キリスト教で言う「復活体験」が彼を訪れたと言う。

そうして、彼は、弟子やその仲間へ向かってさかんに毛脛を出したり、懸命に両手を差し伸べて見せているイエスを思い描いたのである。ひどく滑稽だった。だが、次の瞬間、(略)強いショックを受け、自分の足もとがグラグラ揺れるとともに、彼の信じていたこの世のあらゆる絶対性が、餌をもらったケモノのように急にやさしく見えはじめたのである。(略)そのイエスは、確実に死んでいるイエスであり、同時にまた、信じられないことだが、確実に生きているイエスでもあったのである。(略)あの復活したイエスが、生きていくという事実を信じさせようとして、真剣な顔で焼き魚をムシヤムシヤ食べて見せている姿は、実に滑稽である。だがその私にとっては、そのイエスにイエスの深い愛を感じると同時に、神のユーモアを感じずにはおられなかったのである。<sup>(10)</sup>

ここに「神のユーモア」とあるが、椎名にとって、この「ユーモア」とは、単なる「おかしみ」ではない。椎名はこの「ユーモア」の条件について次のように述べている。

ユーモアは、何等かの意味における絶対性が限定を受けるときに生ずるということをいった。たとえば、小学校で全校の生徒に一場の訓示をあたえるために壇上へ上ろうとしたフロックコートもいかめしい校長先生が踏み段をふみはずしてころんだとき、生徒一同の胸にはユーモアの笑いが生じるだろう。だが、その笑いの可能なのは、生徒たちがその校長先生に絶対的な権威をあたえているかぎりにおいてなのである。(略)もしここで校長先生に生徒達から絶対的な権威をあたえられていなかっただとすれば、それは私たちの日常つかつているところのこっけいの笑いの範疇に入つて来るだろう。

ユーモアというものには、あくまで何等かの意味における絶対性の限定を受けるといふことが必要なのである。(11)

このように、椎名の「ユーモア」は、「絶対性」を「限定」すること、はじめて生まれるものとされる。「絶対性」のないところでの「おかしみ」は、「ユーモア」ではなくてただの「こっけいな笑い」に過ぎないとする。ここでは「絶対性」が「校長先生」に例えられているが、椎名の言う「何等かの意味における絶対性」の究極の地点にあるのは「何よりも死」であろう。この「死」にさえ「絶対性」を与えないためには、どのようなことが必要であろうか。それは、上にも引用したイエスの提示する「確実に死んでいるイエスであり、同時にまた、(略)

確実に生きているイエス」といった「復活」のビジョンである。椎名はこのキリストの与える「自由」、つまり「死」という徹然たる「絶対性」をも超えていられる「自由」を得た境地、その精神的な基盤に対して、「第三の場所」と呼んでいる。

あれかこれかの外に、あれかこれかを超えたところの第三の場所をもっていなければならぬということなのである。その第三の場所は人間に、だからこの世界のどこにも存在しないというのが、私たちのいまままで知つた認識なのである。(略)イエス・キリストという方がやつて来て、人間には不可能なその場所をつくつて下さつたのだ。イエス・キリストから恵みとして与えられた自由こそがその場所なのである。こうしてキリスト者は、現代のあらゆる絶対性に対して強力なたたかいを展開し得るものとなつていたのであり、その意味においてキリスト者は現代においてもっとも前衛的な立場におかれているのである。

だが、そのたたかいはユーモラスなものにならざるを得ないであろう。一つの絶対性にたたかうということは、同時にそれに対立する他の絶対性とたたかなければならぬということになるから。ここにキリスト者のユーモアが生れる。何故ならあれでもなくこれでもない。しいて言えばその間にあるといつた立場におかれるからだ。(12)

このキリストにより作られた「第三の場所」、即ち「自由」

の上で、キリスト者はあらゆる「絶対性」と「たたかう」べきだという。その「絶対性」とたたかうために、言い換えれば一方の「絶対性」を「限定」するために、もう一つの新しい「絶対性」になってしまったことを警戒しなければならぬ、両方の「絶対性」とそれぞれたたかなければならぬという。そして、それら「絶対性」同士の狭間、「第三の場所」に「ユーモア」が湧き出るとする。取りも直さず、椎名の「ユーモア」とは、「死んでいる」と同時に「生きている」というキリストの与えた「第三の場所」からはじめて生まれるものであり、「限定」するという仕組みとして「絶対性」と「たたかう」ための方法のことである。カフカは、〈二人〉の対立の様子を記し、自分自身への「罰」と同時に「贖罪」であろうとした。しかし、椎名の〈二人〉は、対立を伝えるのが目的そのものではなく、手段に過ぎないのである。そうした二項対立をおして、「神のユーモア」を導かなければならない。それについて考えてみたい。

### 三、椎名麟三の描く〈二人〉

先に引用した『創作ノート』を基に書かれた「夜の探索」<sup>(13)</sup>は、昭和三十五年に発表された。主人公の矢掛信吉（文筆業者）は、蓼科高原の別荘を夏の間だけの契約で借りている。その信吉の前に奇妙な二人の少年（久志・今男）が突然現れる。

信吉は、家主の妻から来客を教えられて庭へ出て見ると、そこで二人の少年がふざけ合っていたのであった。二人は、機械のように正確に交互にとび上りながら、また地面にいる相手の登山帽の頭を平手で打つのである。しかも二人は、笑い声をあげるのではなく、殆ど無言でそれをやっているのだ。ただ、大地を打つ足音だけが、バタバタ大きく音を立てていた。<sup>(14)</sup>

「機械のように正確に交互にとび上る」「二人の少年」は、カフカの「二つのボール」そのものである。二人の少年は彼の父（糸崎保田）の手紙を信吉に渡す。長い間の無沙汰をわびるその手紙には、「あの八・二六事件」のことで信吉の罪を「糾弾」するための会が開かれたので、子供たちと草津温泉まで同行を願うとのが書いてあった。「昭和六年のその日」は、「大阪を中心とした関西地方の共産党の組織が、根こそぎに検挙された日」であり、当時神戸地方の一私鉄の細胞のキャップであった信吉も、当然のようにその網にひっかかっていたのであった。いまさら「糾弾」される理由が信吉にはまったく分らなかった。

『八・二六の会』が、信吉を転向の理由で裁くことは、理解できないことだと考えられた。しかもその事件からは、三十年近くもたつていたのである。信吉は、自分自身の過去に思いなやみながら考えた。

『一体、ほんとおれは何をしたというんだらう?』<sup>(15)</sup>

この小説は、主人公の信吉と二人の少年が台風の中を潜り抜けて、蓼科高原から東京を経て、そして草津温泉まで至る十三時間の旅程を描いている。その中で主人公は「下和田で二少年を見失った後、ようやく「糾弾」を受けるための目的地、草津温泉・太田屋旅館に辿り着く。しかし、会はずや解散されており、そこには父親の糸崎だけが待っていた。少年たちは「行方不明」のままだった。糸崎に「無責任」、「裏切り者」、「あんたみたいな人間は、死んだら必ず地獄行きや」と罵られた主人公は、「暗い道を長野原へ向かって歩き」始める。二人の少年を探すためであった。

この小説のふざけ合う「二人の少年」は、カフカの「二つのボール」から来た手法だが、カフカのそれとは違って、互いに対決していない。主人公に付きまとい、主人公の抱く「絶対性」を「限定」するためだけに存在する。しかも、小説の途中からは失踪してしまい、主人公の帯びる「絶対性」を「限定」する役目も果さない。この小説について、斉藤末弘は次のように書いている。

主人公が出かけて行くのは「理由がはっきりしていたわけではない」(六一九頁)という点に、注意する必要がある。言い換えれば「罪」について「心当りがなければからでかけるのであったからだ」。この作品のモチーフは「突然ふつて

わいた身に覚えのない罪に対する抗議」と言っているが、中心を成す問題は、原罪のそれである。<sup>(16)</sup>

この小説のテーマは「罪」、上の文章を借りれば、キリスト教で言う「原罪のそれ」だということなのだが、注目したいのは、そうした「原罪」に対する「抗議」という主人公の反発である。主人公は「糾弾」されるために少年たちについて旅立つのだが、だからといって、罰を受けようとしているわけではない。主人公はあくまでも「突然ふつてわいた身に覚えのない罪」に対して「抗議」しようと思うのである。小説の最後に主人公は考える。「罪は不確かであっても、罰だけはたしかなのだと身にしみて感じられていた。このキリスト教で定めた「原罪」に対する「抗議」という節や、「罪は不確か」でも「罰だけはたしか」という不条理な感慨から、椎名の心に抱いている神に対する不満がかいま見られる気がしてならない。椎名はキリスト者の「絶対性」との戦い方を、「神のユーモア」と書いたが、厳密には、それは「神」ではなくて、キリストの「ユーモア」のことであろう。ここに椎名の「ユーモア」の盲点がある。キリストの与える「死んでいく」と同時に「生きていく」という、「死」を克服するための精神的な基盤は受け入れなければならない。「原罪」や「死」を負わせる「神」への不満は無くならないのである。それゆえ、主人公の「絶対性」を「限定」していた「二人の少年」は姿を消し、主人公の「罪」に対する「抗議」は絶対的な性質のものと化すのである。椎名は「絶対性」を「限定」

できる「第三の場所」を体得し、そこからキリストの「ユーモア」という独自の戦い方を具現させる。しかし、その「ユーモア」を用いて「神」の恩寵を伝えるのではなく、それどころか、椎名の文学世界には皮肉にも「神」への不満が根ざしているのである。

このような神への不満や抗議は、その三年後に書かれた「カラチの女」<sup>(17)</sup>で一層明らかになる。椎名は、昭和四年から六年まで宇治川電鉄（今の山陽鉄道、神戸→姫路）で車掌をしていたことがあり、この小説は、その時の経験に基づいて創作されたものである。主人公の「私」（須藤）が勤めていた関西の私鉄の乗務員詰所では、金持の娘が婿をさがしているといううわさが広がっていた。軽食堂の主婦の父方のいとこが、（現在はパキスタン領であるが）インドのカラチで、雑貨商として成功しているが、その末娘は内地の男と結婚させて、内地へおいておきたいというのであった。持参金は、「私」の日給の八千三百日分に当たる一万円というのである。当時「私」は、非法法の共産党の細胞を組織しており、そのキャップをやっていたのだが、資金に窮しており、しかも街頭細胞でもあり上部機関でもある男から、その金を獲得するようにという指令を受ける。「忠実な黨員」であった「私」は、花婿候補に申し込み、主婦は、カラチへ手紙を出した。しかし、延々と返事はなく、カラチに電報も打つのだが、恐らく返事などないであろうと「私」も何となく気づいている。主人公の通う喫茶店には女給の加奈子と直子がいるが、「私」はその二人のに付きまとわれていた。最初付き合っ

ていた加奈子は、「私」を引き留めるために自殺騒ぎを起こし屋上から落ちるが、大した怪我もなく済んだ。「私」がカラチに電報を打つてから十日程が経ったある日、加奈子と直子が連れ立って「私」の前へと現れる。

出勤のために階段を降りようとすると、思いがけなくあの加奈子が土間に立っているのだ。（略）そして気がつくとき、直子が表で、しかもその加奈子の後にひかえるようにして立っているのだ。（略）

「結婚して」と加奈子はせつばつまった声を出した。「結婚してくれへんと、うち、死ぬもん」（略）

「おれは結婚せえへんのや」（略）

私は、土間へ降りて歩き出すと、内と外に門番のように立っていた二人の女は、それぞれ私から身をひらいた。（略）振り返ると、加奈子は、入り口の格子戸から出ようとしていたが、直子の後姿には小さなシヨックをうけた。首がなかったからである。下を見ていたせいだったかも知れないが、怒り気味の肩をもった四角な胴体と足だけがあったのだ。私は、急ぎ足で道角を曲った。<sup>(18)</sup>

ここの「二人の女」は、やはりカフカの〈二人〉に着目した手法だといえよう。直子の姿から「首のなかった」錯覚を呼び起こすことで、「死」のイメージを読者に与えたのは、もう一方の加奈子の自殺未遂事件の時の大して怪我さえしていない



「生」のイメージと交錯し、「運動」をめぐる「絶対性」を帯びている「私」を「限定」するのである。ここでも、「夜の探索」の「二人の少年」と同様、「二人の女」は互いに対決するのではなく、「二つの否定の同時性」を主人公に付きまとわせることで、「ユーモア」を導いているのである。小説の最後の文章には次のように書かれている。

しかし私は、いまもそのときの私と同じ羽目に陥っているのだ。神という名の遠すぎる非現実的なもののために、犬ころのようにみじめにひきずりまわされているのである。<sup>(19)</sup>

作家がこのようなにはつきりと「神」と言い切っているからには、「カラチの女」が「神」、「共産党の細胞」は宗教団体や「教会」に、「遠すぎる非現実的なもの」、即ち社会主義の「革命」はキリスト教の言う「天国」の比喩である、というふうに図式化して考えることも出来よう。つまり、作家にとって「神」とは「カラチの女」のように「非現実的な」「遠すぎる」存在であり、またその「神」を想定することにより、「犬ころのよう」にみじめにひきずりまわされるのである。この小説の「私」のような「忠実な党员」、信仰の世界では篤実なキリスト教徒で知られている作家としては非常に過激な発言であると同時に、自分の信仰への懐疑を示しているといえる。椎名が、「二人の女」にそれぞれ「生」と「死」を象徴させたのは、「死んでいる」同時に「生きている」というキリストの「第三の場所」

から湧き出る「ユーモア」を伝えると同時に、「生」と「死」を司る「神」への懐疑もこの小説のテーマであったためであろう。

また三年後の昭和四十一年に発表された「復縁」<sup>(20)</sup>は宗教的な比喩はより巧みになっているのだが、「神」に対する懐疑は一層深化している。それに比べ、カフカの〈二人〉の役割を背負う人物たちは、小説の最後の一場面にだけ登場するほど、大幅に縮小されている。主人公の「私」（米倉伸三）は、片肺がない酸素溶接工で、どうしても賭け事の競輪をやめることができない。身内たちは、乞食のような恰好で金を借りに来る。「私」を「性格破綻者」としてみている。「私」の望んでいるのは、妻の竹子とひとり息子の和夫と、ふたたび平凡で平和な家庭をもちたいということである。そのためにお金が必要だ。竹子の家から「私」が家出したのは、自分自身の自由がほしかったからである。しかし浮浪者ようになってしまった「私」が、昔一緒に暮らしていた妻の実家の周りをうろうろしたり、電話をかけてみたりしても、彼女を直接見ることも声を聞くことも出来ない。十年も妻子と離れて「無限の距離」にある「私」は、再び妻子との「復縁」を願望しながら、またもや京玉閣の競輪場に来ているのである。

ここでは、主人公の「私」は聖書の「放蕩の息子」のような役を演じているのだが、この小説では、「神」は実在するか否かという問いが、妻の「竹子」は生きているかどうかという問いとして表現されている。「私」はその問いを解くために、「竹

子」に直接会いに行くことを決意する。「もし竹子が死んでいてこの世にいないとなれば、私は、とんだ喜劇を演じていたということになりかねないからだ。全くもう恥も外聞もないという気持だった」。この箇所は、椎名の「神」への懷疑が最高潮に達しようとしていることを示しているようにも見て取れる。彼女の家に着いた。「今晚は……今晚は……」しかし返事はない。「私」のなかに怒りが走った。裏手へまわった。だが、勝手口の板戸にも鍵がかかっている。再び表へまわった。

私は一瞬ぎよつとした。心臓も動悸を高めた。不安や恐怖や期待やらの複雑な感情が私の足をとめてさえたのだ。しかし(略)、その人影は、二人の老婆であることが分かった。

二人の老婆は、身を寄せあうようにして立っていた。まるでおたがいに身を支え合いながら生きていくといったふうだ。しかしどちらも竹子の母親でないことはたしかだった。(略)もちろん私は、この老婆たちの存在について、聞いたことも見たこともなかった。(略)

「それじゃ、竹子……竹子さんのことは知っているんですよう？」

二人の老婆は一樣に首を振った。

「じゃ、いないんですか？」

ふたたび、二人の老婆は首を振る。

「じゃ、いるんですね」

またもや、老婆たちは、首を振った。(21)

いかにも聖書の「三度の否定」の場面を連想させる、この不気味な「二人の老婆」は、やはりカフカの(二人)の手法だと言えよう。そして、この謎めいた(二人)の登場人物は、次の箇所により一層読者を戸惑わせる。老婆たちが出てきたとする、格子戸はまだ開いているはずだと思った「私」が、「もう問答無用とばかりに」格子戸に向かって歩き出した、その次の瞬間であった。

突然、私は恐ろしい力でななめ後ろからつきとばされた。一瞬、私は何事が起こったのか理解できなかった。私は、足をもつらせ、ぶざまに尻餅をついていた。その私の目に格子戸のなかに駆け込む二人の老婆の姿が見えた。そしてたちまち格子戸は、音高くびしゃんとしめられた。(22)

結局、「神」は自分の存在の有無について答えてくれない。椎名は、この小説と同じ時期に「復活と私」というエッセーで「私は神は知らない。しかし(略)神を感じることは出来るのだ」(23)と書いている。この小説において、「恐ろしい力でななめ後ろからつきとばされた」といった何の蓋然性もない「何事」かによって「神」を感じさせていることは、椎名の「感じる」だけの「神」の認識を表していると言えよう。椎名にとって、「神」とは「感じる」ことは出来るが、その実在を確かめようはない存

在に他ならないのである。

この作品の「二人の老婆」は、先述の二作品と同様、対立し合っているわけではない。カフカの〈二人〉の役割とは違って、主人公の持つ「絶対性」を「二つの否定の同時性」として「限定」させるために登場しているのである。また、この小説では、「神」に近づくために必ず経ないとならない空間である「教会」が、「競輪場」として設定されている。ここには、「宗教」をひとつの賭け事のように感じ取っている椎名の意識が表れていると言えよう。宗教というのは、実在するか否かさえも分からない存在に自分をかける、つまりは賭博のようなものだという、作家の宗教観の一断面、「神」への強い「懐疑」を確認することが出来るよう。

#### 四、むすびに

カフカは自分のなかの対立し合う〈二人〉を作品のなかに投影したが、それは椎名の理解する、互いに否定し合い、「限定」し合うものではなかった。相反する意識同士の戦うだけの苦悩の表現であって、何かの目的のために作用するものではない。椎名はカフカから〈二人〉を学んだが、それは椎名にとつて多分に恣意的に解釈された。椎名は独自のユーモア論へそれを持っていったのである。椎名にとつて「ユーモア」とは、「絶対性」を「限定」し合う方法でのそれではなければならない。そして、そのように互いに「限定」された「絶対性」同士のあいだ

の「第三の場所」にキリストの「自由」があるのだとし、そこからキリストの「ユーモア」が湧き出るとする。このような椎名の「ユーモア」を文学で描くには、カフカの〈二人〉はまさに打って付けだったといえよう。しかし、〈二人〉の手法を用いて具現されるべき「神」の恩寵やそれへの賛美などは椎名にはない。皮肉にも「神」へ不満や懐疑があつたのである。「死」への恐怖など、絶対的にしか受け入れようのない絶望的な意識を解消し、キリストの「死んでいながら同時に、「生きている」という「復活」のビジョンを提示しながらも、その一方には「神」に対する懐疑が深く根を下ろしている事も、椎名文学の一面として理解されなければならないであろう。たとえ、この自家撞着した椎名の信仰をめぐって、椎名の「神」は、「実際の神でもなんでもない。「人間イエス」の成立の根元に実在する「父なる神」の「イメージ」にそれはすぎない」と批判<sup>(24)</sup>されていても。

#### 【注記】

- 1 フラント・カフカ「ブルウムフェルト、ある中年の独身者」『カフカ全集』Ⅲ、新潮社、昭和二十八年七月、三七三頁
- 2 椎名麟三「夜の探索」『椎名麟三創作ノート』Ⅱ、青柿堂、昭和五十六年十一月、七六頁
- 3 谷口茂「フラント・カフカ論―ユードントゥームとの関係を中心に―」、明星大学出版部、昭和五十八年七月、二五六頁

- 4 マックス・プロート、辻理ほか訳『フランツ・カフカ』、みすず書房、昭和三十年一月、一七六頁
- 5 新村出『広辞苑』、岩波書店、平成十年十一月、二七一―二七六頁
- 6 山田忠雄ほか『新明解国語辞典』第七巻、三省堂、平成十四年三月、一五四―一六〇頁
- 7 椎名麟三「わが心の自叙伝」、初出は、「神戸新聞」、昭和四十二年十月二十二日、引用は『椎名麟三全集23』、昭和五十三年三月、四六三―四六五頁
- 8 遠藤周作「椎名麟三論―微笑を取りめぐるもの」、初出は『文芸』、昭和三十一年十一月号。引用は椎名麟三全集 別巻「研究編」、冬樹社、昭和五十四年十月、三〇〇頁
- 9 奥野健男『文学は可能か』、角川書店、昭和三十九年五月、一四八頁
- 10 椎名麟三「神のユーモア」―「私の聖書物語」、初出は「婦人公論」、昭和三十一年八月。引用は『椎名麟三全集15』、昭和四十九年三月、四〇三―四〇六頁
- 11 椎名麟三「ユーモアの積極性」、『東京新聞』、昭和三十六年三月十四日。引用は『椎名麟三全集18』、昭和五十一年六月、八六―八七頁
- 12 椎名麟三「ユーモアについて」、雑誌「月間キリスト」、昭和三十八年五月号。引用は『椎名麟三全集19』、昭和五十一年十月、五一三―五一四頁
- 13 椎名麟三「夜の探索」、『新潮』、昭和三十五年十一月号
- 14 椎名麟三「夜の探索」、引用は『椎名麟三全集8』、冬樹社、昭和四十六年九月、六一―九頁
- 15 同右
- 16 斉藤末弘『作品論椎名麟三2』、おうふう、平成十年十月、二〇九―二一〇頁
- 17 椎名麟三「カラチの女」、『小説新潮』、昭和三十八年四月号
- 18 椎名麟三「カラチの女」、引用は『椎名麟三全集10』、冬樹社、昭和四十七年三月、七九―八一頁
- 19 同右、八一頁
- 20 椎名麟三「復縁」、「群像」、昭和四十一年四月号
- 21 椎名麟三「復縁」、引用は『椎名麟三全集10』、冬樹社、昭和四十七年三月、二一九―二二〇頁
- 22 同右、二二〇頁
- 23 椎名麟三「復活」と私、「信徒の友」昭和四十一年四月号。引用は『椎名麟三全集20』、冬樹社、昭和五十二年四月、二六一頁
- 24 富吉建周『増補聖書のイエスと椎名麟三』、創信社、平成十七年三月、一三七頁

【付記】

本稿は平成二十七年日本比較文学会九州支部秋季大会（平成二十七年十二月、於九州産業大学）において口頭発表を基に執筆したものである。会場でご意見をくださった方々に、この場を借りて感謝申し上げます。

（九州大学大学院地球社会統合科学府博士課程三年）